

沙弥千人塚遺跡

- 所在地 坂出市沙弥島南通り65・66
- 調査主体 坂出市教育委員会
- 調査期間 平成8年10月1月～12月28日
- 調査面積 約250m²
- 調査担当者 社会教育課 今井和彦
- 調査の原因 遺跡確認調査
- 調査結果の概要

沙弥千人塚は周辺に小墳が所在することも含め、古くから知られていた方墳である。今回の調査は過去の記録の再確認と周辺小墳の内部調査を中心に実施した。調査の結果、千人塚は列石の検出とトレンチ調査により、その規模が従来知られていたよりも大きく南北14m、東西16m、高さ2mの方墳であることが判明した。また墳丘測量の結果から従来検出されていた竪穴式石室は墳丘の東よりには南北を主軸に構築されたことが確認されている。

一方、周辺の小墳の調査では1～7号墳については千人塚築造後の6世紀末～7世紀前半を中心に相次いで築造されたものと判明した。その中で唯一横穴式石室を埋葬主体を持つ5号墳には多量の副葬遺物が残されており、鉄製の鎌や釣針、製塩土器片のほかミニチュアの長頸壺を二段重ねにした特殊な形態を持つ須恵器も出土している。

8.まとめ

今回の調査により、千人塚の詳細な規模が明らかになっただけでなく、周辺の調査から、千人塚を中心とする弥生時代から古墳時代にかけて墳墓が築造されたことが判明した。特に5号墳を中心とした副葬品に見られる特殊性は、海上交通の掌握や製塩業、漁業を背景に備讃瀬戸で活躍した海人の墓制を知るうえで大変貴重な資料となろう。



第1図 遺跡の位置（「本島」）



第2図 1号墓調査状況



第3図 千人塚古墳墓底部列石検出状況

にし なが お じょう せき 西 長 尾 城 跡

1. 所在地 綾歌町岡田上2312-10, 2312-13
2. 調査主体 綾歌町教育委員会
3. 調査期間 平成9年1月13日～2月20日
4. 調査面積 約9,000m²
5. 調査担当者 綾歌町教育委員会
主事 近藤武司
6. 調査の原因 分布確認調査(国庫補助事業)
7. 調査結果の概要

綾歌町の計画する綾歌町森林公園整備計画が進められる中、区域内に所在する西長尾城跡の整備も進めていく必要性かでてきた。

予備調査として西長城保存会を中心に史料収集等の作業は進行中であり、今年度より国庫補助事業を利用し、現地における基礎史料の作成ということで分布確認測量調査を実施することになった。

これまでにも遺構の分布範囲について触れているものもあるが実測を行った経緯もなく詳細については知らされていないことから山頂の本丸部分から平板測量調査を実施することになった。尚、尾根に沿って溝濃町と境界を共にしており遺構が両町にまたがって分布しているが伐開、測量とも綾歌町側のみの実施とした。

調査は、本丸部分から幾筋にも分かれて延びている連郭式郭列のうち城内と考えられる北に向かっての郭列を中心的に実施した。

測量を実施するにあたっては、調査の妨げになる部分については伐開をし、平板による測量を行った。縮尺は1:100、コンターラインは25cm間隔とした。

遺構の分布状況及び種類については、尾根に沿って奥行き10m、幅30m程度の郭が連なっており、測量には至っていないが谷を挟んで西側の尾根も同じような状況である。

更にこの谷には井戸跡が残存しており現在でも水が溜まっている。この井戸は、西長尾城唯一の水源となっており貴重な生命線であったと容易に推察することができる。

この谷をはさむように展開する郭列の両外側には土星が築かれていることからこの中に外敵が侵入することを強く拒んでいたものと思われる。

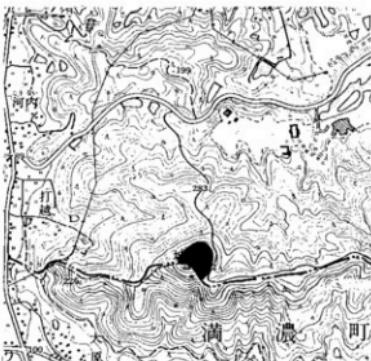
8.まとめ

今回の調査は、綾歌町森林公園整備計画に伴い西長尾城の遺構分布状況を確認した上で今後の調査に望むための第1段階であった。

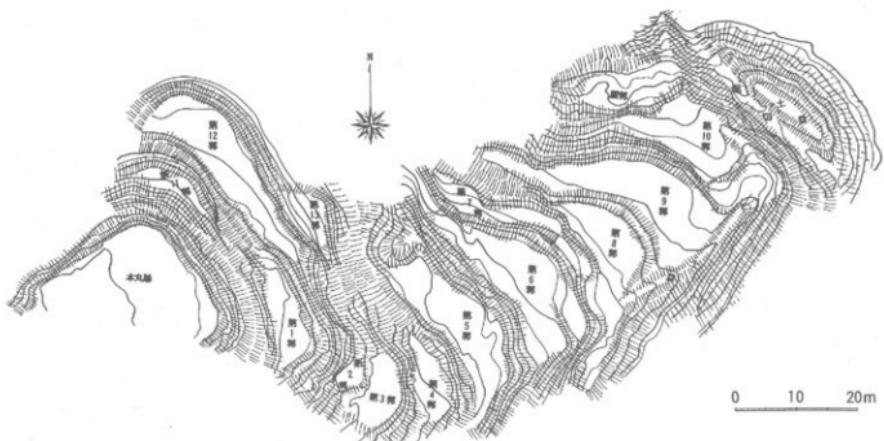
今年度の調査は全体の約2割程度の調査であったが、次年度以降についても継続してこの測量調査を実施し、全体状況を把握するとともに今後の内容確認調査に取り組みたいと考える。

(近藤)

(測量成果は『綾歌町内遺跡発掘調査報告書』綾歌町教育委員会1997. 3にて報告)



第1図 遺跡の位置（「善通寺」）



第2図 西長尾城跡測量図



第3図 西長尾城跡全景



第4図 連郭式郭列



第5図 土塁残存状況



第6図 堀切残存状況

きたみや 北ノ宮古墳、北山遺跡

- 所在地 綾歌町岡田西1459-1, 1462
- 調査主体 綾歌町教育委員会
- 調査期間 平成8年9月27日～10月2日
平成8年12月21日～12月28日
- 調査面積 約150m²
- 調査担当者 綾歌町教育委員会主事
近藤武司
- 調査の原因 団体営土地改良総合整備事業
- 調査結果の概要

調査地は、綾歌町西部に展開する岡田台地上に位置している。新池の周りには車塚を中心とした数十基の古墳時代中期中小円墳から構成される岡田万塚古墳群が形成されており北ノ宮古墳はこの中でも最も南に位置している。

墳丘上には、重光七荒神の1つである祠が祭られていることから主体部付近については比較的の保存状態が良いが、墳裾部分については、古くからの開墾等により掘削を受けているようで規模等については明確でなかった。

調査については、試掘トレンチによる墳裾確認を試みたが、開墾による掘削が予想以上で周溝等の確認ができなかったことから墳丘の規模特定にはいたらなかった。

また遺物についても全く検出されなかったことから墳丘の築造時期についても不明瞭であるが、版築の確認ができたことと人骨出土の言い伝えから墳丘であることには間違いないようである。

遺構については、古墳に関連するようなものは発見できなかったが、墳丘から東に設定した1トレントで他から運ばれてきた川原石を含む落ち込みを検出した。この落ちには、遺物は含まれていなかったが周辺で中世の所産と考えられる土師器を探取していることと合わせてみると人工的な中世集落遺構の一部である可能性があるとして、これを北山遺跡とし2次調査に踏み切ることになった。

北山遺跡は北ノ宮古墳の東に位置し、比較的地盤も安定している緩やかな微高地で西側には大東川も流れていることから生活するには非常によい地形にある。大東川以西は川原石が堆積していることから考察するとやはり生活基盤は大東川以東と考えられていたが、これまでにこの岡田台地での集落跡は確認されていなかった。

今回の調査は、北ノ宮古墳の試掘調査時に発見した落ちを中心に遺構検出作業を行った。念の為北ノ宮古墳の規模特定の資料を得る可能性があるので墳丘据部から調査を行った。

調査の結果、北ノ宮古墳に関連するものは遺物、遺構ともに全く検出されなかった。また、試掘トレントで検出していった落ちについては、径8m、深さ60cmを測る大きな土壤の肩部分であった。中の堆積土は下層がかなり粘性土であることから水の溜まりとして利用していたように推察できる。また大きめの川原石を敷きつめていたことから庭池として利用されていた可能性もある。



第1図 遺跡の位置（「普通寺」）

遺物は、13世紀後半の所産と思われる土師器片が土壇の底部からまとめて検出されており、当時の生活形態を伺うことができる。

8.まとめ

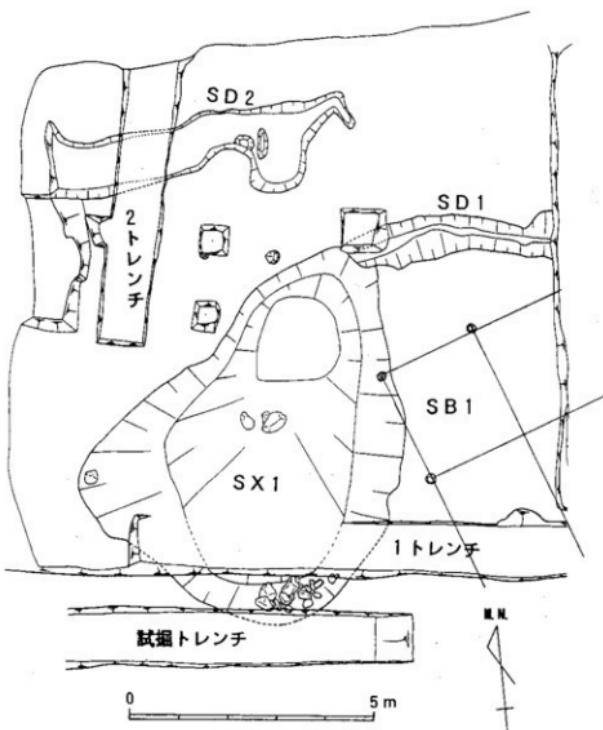
今回実施した調査の結果、北ノ宮古墳については版築の確認ができたのみで周溝及び遺物の検出ができなかったことから詳細な内容を把握することはできなかった。

保護措置として墳丘の版築が確認できる範囲については現状保存することとした。

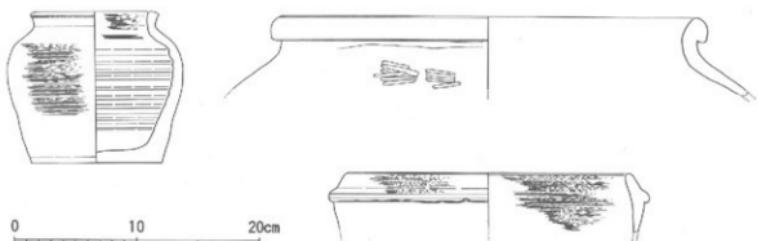
当調査で新しく発見した北山遺跡については、遺構を検出した範囲が限られており周囲が開墾により削平されており遺物、遺構とも全く検出されていないことから規模等については不明であるが住居跡の一部及び土壇、遺物から中世の集落遺構であることを推察できる。

これまでに、この地域では集落遺構の確認ができていなかったので、今回の調査でわずかではあるが生活の一部を確認できたことは十分な成果があったと思われる。 (近藤)

(『綾歌町内遺跡発掘調査報告書第1集』綾歌町教育委員会1997. 3にて報告)



第2図 北山遺跡遺構配置図



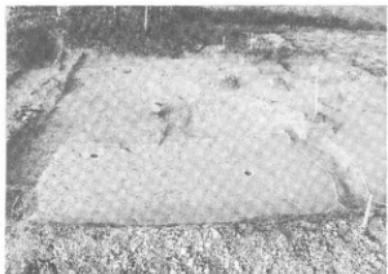
第3図 出土遺物実測図



第4図 北ノ宮古墳全景



第5図 試掘時の北山遺跡検出状況



第6図 北山遺跡完掘状況



第7図 S X 1 完掘状況

きた ばら 北 原 遺 跡

- 所在地 綾歌町岡田東1156-2
1157-2
- 調査主体 綾歌町教育委員会
- 調査期間 平成8年12月10日～12月17日
- 調査面積 約500m²
- 調査担当者 綾歌町教育委員会主事
近藤武司
- 調査の原因 県営単独緊急農道整備事業
- 調査結果の概要

今回の調査地は、綾歌町のはば中央、岡田地区では北東端に位置し、地形も比較的平坦で仁池の畔から緩やかな微高地となっている。

試掘調査については、平成8年10月28日に県教育委員会によって実施され、本調査については、県教育委員会と協議した結果、諸般の事情により町教育委員会において実施する運びとなった。

試掘調査により、一部を除いて遺構の分布範囲については把握できていたので本調査の必要な部分及び試掘調査未実施部分についての調査を実施した。

遺構面は北から南に向かって傾斜しており最南端で地表下約30cm、北部については既に削平を受けており遺構密度が極端に薄くなっている。

検出した遺構は、古代の建物跡と柵列跡、弥生土器片を含むピットと浅い溝状の落ちであった。弥生時代の生活基盤もあったと思われるが、遺構の密度から考えると、その後に古代にかけての造成が行われたことにより部分的に僅かな遺構が残存しているようである。遺物が比較的多く含まれていることから以前はまとまった集落が所在していたことが伺える。

古代の遺構については、遺物はそう多くはないものの柵列及び住居のピットが良好に残存していた。ピットの大きさから考えてもかなりの規模の建造物があったと思われる。

8.まとめ

今回の調査は、限られた期間内での調査ということで十分に観察する余裕がなかったが、これまでには仁池の内側で土器片の散布が認められていたことに加えて、その周囲で部分的に削平を受けながらも遺構の確認できたことにより生活基盤があったことが確認された。

また、遺跡の内容としては弥生時代後期の集落跡が展開していた後、古代期に大々的な削平を行い新たな集落を築いたようである。

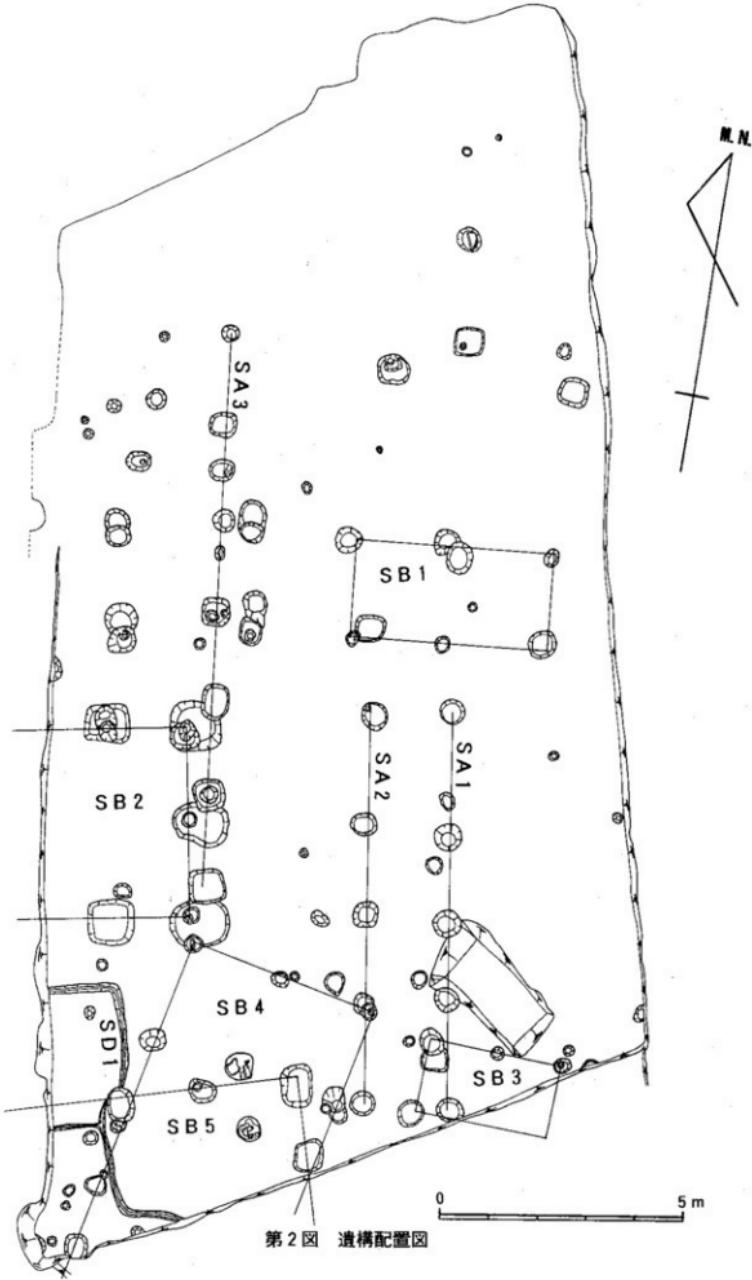
弥生時代後期の遺構の分布を明らかにすることはできなかったが、わずかに確認された遺構からの遺物量を考えると安定した生活拠点となっていたようである。

周辺は近年の開墾により削平されており遺構は残存していないかったが、当時は集落が展開していたものと考えられることから今後の周辺開発に伴う調査により遺跡の全容を解明することが期待される。

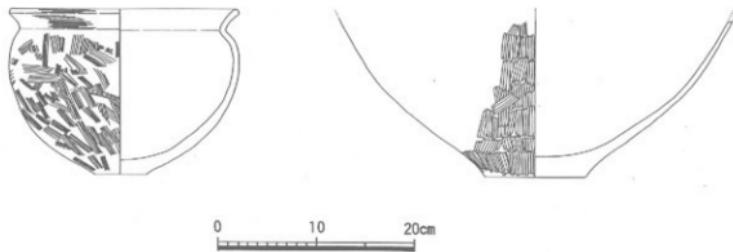
(近藤)



第1図 遺跡の位置（「善通寺」）



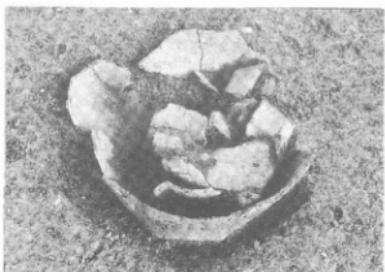
第2図 遺構配置図



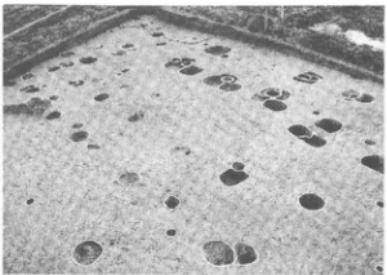
第3図 出土遺物実測図



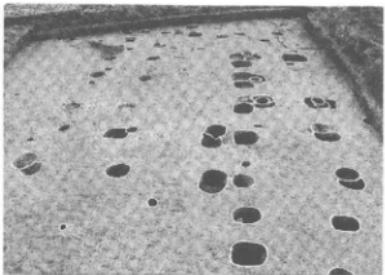
第4図 作業風景



第5図 S P 44遺物出土状況



第6図 遺構完掘状況（北東より）



第7図 遺構完掘状況（北より）

羽床城跡

1. 所在地 綾歌郡綾南町羽床下
2. 調査主体 綾南町教育委員会
3. 調査期間 平成9年2月5日～14日
4. 調査面積 約2,000m²
5. 調査担当者 五所野尾亮
6. 調査の原因 保存管理計画策定
7. 調査結果の概要

今年度は、二の丸に5ヶ所、その周辺の土壠及び池で4ヶ所、合計9ヶ所のグリッドを設けて発掘調査を行うと共に、二の丸の西部から北部にかけての測量調査を行った。

二の丸の発掘調査では、黒褐色腐植土の表土が6cm前後あり、その直下が淡赤茶色粘質土の地山で、遺構や年代を明らかに出来るような遺物は発見されなかった。本丸と二の丸を結ぶ虎口部の調査で、両側の土壠の斜面に拳大の河原石がまばらに点在しているのが検出されたが、これが何のためのもののかは不明である。本丸と二の丸を区切る土壠の発掘調査では、二の丸より1mあまり高い本丸側の地山の上に2m余り赤土で盛り土をしていることが明らかになった。またこの盛土中から士師器と思われる破片が出土し、ほかにも須恵器片が見つかっており、かつて存在した言われる古墳と関りがあるものと考えられる。二の丸西部の池の土手は、底から3mの高さで50cm低い余水吐があるがユルがなく、近世以降の灌漑用の溜池とは考えられず、羽床城に伴う造構と思われ、羽床城に伴う生活用水の貯水池とも考えられたが、溜り水はない。池の中の発掘調査では、池の堆積には必ず混じっている植物の葉や枝が混入していない。ただ、粘土と細砂が薄く層状に堆積しており、水があった可能性はあるが、多量の水が溜っていたとは考えられず、城の西方から二の丸と本丸に通する谷筋を登ってくる敵を防ぐ防御施設(土壠)と思われる。

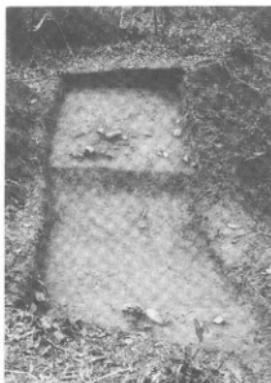
また、測量調査の結果、城の北辺にあたる部分で空堀と思われる遺構が確認されている。



第1図 遺跡の位置（「滝宮」）



第2図 二の丸調査区状況



第3図 虎口部調査区状況

にしむら 遺跡

1. 所在地 綾歌郡綾南町大字陶
字西村北4178番
2. 調査主体 綾南町教育委員会
3. 調査期間 平成9年11月26日・27日
4. 調査面積 41.7m²
5. 調査担当者 五所野尾亮
6. 調査の原因 学習塾の建設に伴う擁壁及び
浄化層の設置工事
7. 調査結果の概要

中世集落遺跡、西村遺跡の中心地西部にある当該地区的建設工事に先立ち、遺構の破壊が行われる可能性の高い、擁壁部分と浄化槽設置部分を対象にトレンチを設定、立会調査を行った。検出された土層は上層から、黒灰色粘質土

(現在の耕作土)、褐灰色砂質土、灰褐色砂質土、

褐灰色砂質土(トレンチによっては炭化物の混じる暗褐灰色砂質土に変化)(:以上3層は旧耕作土か)、明褐灰色粘質土(以下の層位は地山)、暗紫灰色粘砂層(部分的に検出)、灰白色粘土層となっている。4層目の褐灰色砂質土からは多量の須恵器、土師器、瓦質土器等の細片が出土しているが、これらの土器は遺構に伴うものではなく、また強いローリングを受けているので、本来存在していた遺構面に伴うものが、耕作による搅乱を受けて土層中に混入されたものと考えられる。この褐灰色砂質土の直下の土層が地山である明褐灰色粘質土であり、この土層の上面においてピット及び土坑等の遺構がまばらに検出され、これらの遺構の内部及び地山上面において須恵器の壺、甕等の破片が少量出土している。

8. まとめ

今回出土した遺物は、旧耕作土層に包含されて出土した平安時代から中世以降のものと、地山上面及び遺構中から出土した平安時代後期の遺物の2時期に分かれると考えられる。地山上面及び遺構内から出土した須恵器は、かつて昭和55年に県教育委員会が西村遺跡の調査を行った際に発見された西村2号窯の遺物と類似しており、あるいは同窯で焼成された可能性がある

(五所野尾)



第1図 遺跡の位置（「白峰山」）



第2図 1トレンチ（南から）



第3図 遺物出土状況(2トレンチ焼土層下)

まるやま
丸山窯跡（3号・7号・8号窯）

1. 所在地 綾歌郡綾南町大字陶字丸山
1108番地1
2. 調査主体 綾南町教育委員会
3. 調査期間 平成8年12月12日
～平成9年1月22日
4. 調査面積 36.5m²
5. 調査担当者 五所野尾亮
6. 調査の原因 集配場倉庫及び駐車場建設に伴う擁壁設置
7. 調査結果の概要

丸山窯跡群所在の水田内における集配場の倉庫及び駐車場の建設に伴い工事計画に基づいて立会調査を行った。計画によると、遺構面に影響を与えるような掘削が行われるのは敷地周囲



第1図 遺跡の位置（「白峰山」）

に巡らされるフェンスの基礎コンクリートの設置時のみであり、これは敷地周縁部に現水田面から深さ約70cmほどの掘削を行うもので、この掘削を対象に、現水田の南辺部分にトレンチを幅1mで設定、全長32.2mにわたり水田畦畔に沿って立会調査を行った。この立会調査の際に、これまで知られていなかった丸山7号窯跡に伴う灰原及び8号窯跡焼成室が検出され、その後工事中に既知の3号窯跡焼成室が出土した。以下にそれら窯跡及び灰原のそれぞれについて概説する。

3号窯跡 焼成室 平行する2本の敵と3本の溝（炎道）を持つロストル方式の半地下式瓦窯である。確認された最大幅1.3m。焼成室の傾斜角は約13°である。焼成室床面には高さ25cm～30cmのしっかりしたロストルが検出された。なお天井部は崩落しており、窯の本来の高さ等は不明であるが、窯壁は溝底面から40cm～50cmほど残存していた。この窯跡は、搅乱のため試掘時には検出されなかったが、工事の掘削が予定より南方まで及んだため粘土採取時の搅乱を免れた部分が露出した。その出土位置から、既知の3号窯跡の焼成室と考えられる。窯内部の状況からは、操業の回数は確認できなかった。

3号窯跡 出土遺物 ロストルの溝の中から多数の瓦片が出土した。その内、軒丸瓦片が1点、軒平瓦片が4点含まれていた。軒丸瓦は細片のため確実でないが、文様は左巻きの三ツ巴文か。軒平瓦はすべて尾部の短い右巻き三ツ巴文であり、同一時期に焼成されたものようである。時期は12世紀末以降であろう。

7号窯跡 灰原 灰原はトレンチ内において東西幅5.3m、およそ10cm～20cm（上部は搅乱を受けている）の厚さで検出された。その位置から未発見の窯跡に伴う灰原と判断し、7号窯跡灰原と呼称する。調査トレンチの幅が狭いためその規模については不明であるが、南斜面の下方にさらに広がっているものと推定される。また、本来この灰原の北に7号窯の本体が存在していたものと考えられるが、この水田の造成等により既に破壊されていると考えられる。

7号窯跡 灰原出土遺物 炭化物が混入する暗紫灰色粘砂層から多量の瓦が出土した。表面に布目压痕、裏面にはタタキが入ったもので、総量の大部分が通常の平瓦と丸瓦であり、そ

の中にごく少量、軒丸瓦と軒平瓦が発見された。いずれも破片の大きさに大小の差はあるが割れて破棄されたものばかりであった。

出土した軒丸瓦、軒平瓦のうちで瓦当部がはっきりと判別できるものは、軒丸瓦片3点、軒平瓦片12点である。これらの瓦当部の文様は全て三ツ巴文であり、古い型式である巴文尾部が伸長しつながって圓線状を呈するものから、尾部の短いもの、また三ツ巴が右巻きのもの、左巻きのものなど、いくつかの型式が見られる。おそらく12世紀中ごろ以降、複数回にわたり窯の操業が行われたものと考えられる。

8号窯跡 焼成室 平行する2本の畝と3本の溝（炎道）を持つロストル方式の半地下式瓦窯である。検出されたのは焼成室で、確認された長さ1.3m、最大幅1.5mであった。残存する窯壁の最大高は溝底面から45cm、焼成室の傾斜角は約16°である。7号窯跡灰原と同様、未発見の窯跡と判断、8号窯跡とする。敷地外となるので調査はできなかつたが、南方に焼成室の続きと灰原が存在するものと考えられる。7号窯跡灰原の東側に接して検出されており、窯の上部は既に耕作時あるいは粘土採取時の搅乱による削平を受けていたが、焼成室床面のロストル及び瓦片は辛うじて残存していた。ロストルの畝が非常に低いことや（10cm前後）、ロストルを含めた窯壁の焼成の状況からみて、今回検出された部分は焼成室の上端部にあたるものと考えられる。窯内部床面に散乱する瓦は、淡黄褐色や淡黃灰色を呈する焼成不良のものが過半数を占めていた。窯の使用回数については窯内の堆積状況からは不明。

8号窯跡 出土遺物 窯跡床面からは多数の平瓦及び丸瓦が出土しているが、一方で軒丸瓦、軒平瓦等の出土はごく少量で、操業時期の推定は困難である。軒丸瓦は唯一、左巻き三ツ巴文の小片が1点のみ出土した。軒平瓦の出土はなかった。なお、特筆すべき遺物として、第7図（8）のような瓦片が出土している。一部分のみであるため現在のところ確定にはいたっていないが、鬼瓦の一部の可能性を考えている。瓦当部を持つ瓦にとほしく、8号窯跡の時期決定は困難であるが、7号窯跡等、他の丸山窯跡と同様の時期に操業されていたものであろう。

8. まとめ

今回の調査により、丸山窯跡において新たに2基の窯跡の存在が確認され、合計8基となつた。既知の3号窯跡についても窯的方式、製作された瓦種等についての新たな資料を得ることができた。また、今回2基の窯跡が新たに発見されたように、この丸山窯跡群には、現在までに知られていない窯跡、既に破壊された窯跡がまだ存在する可能性が高い。今回の発掘に伴うそれぞれの窯跡の操業の時期については、12世紀後半を中心とした時期であろうと考える。これららの窯跡群で生産された多量の瓦の流通状況等については今後の課題である。



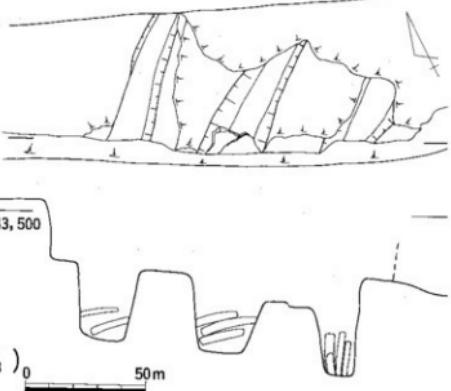
第2図 7号窯跡（灰原東端部）



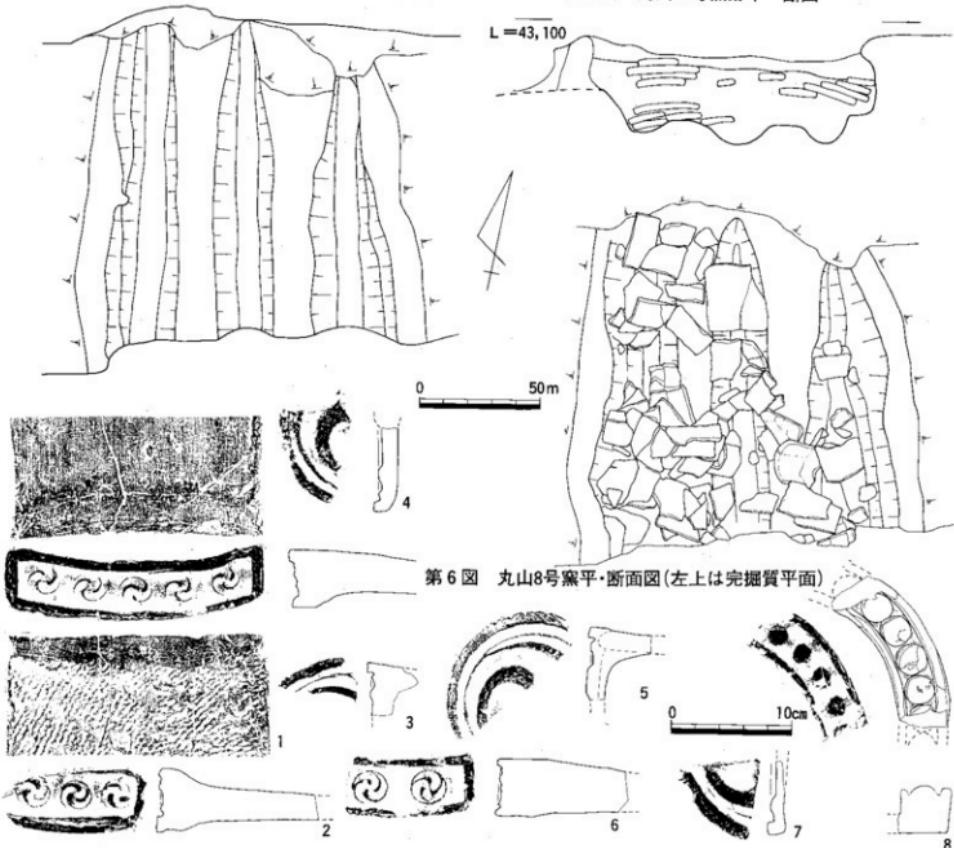
第3図 8号窯内瓦片出土状況



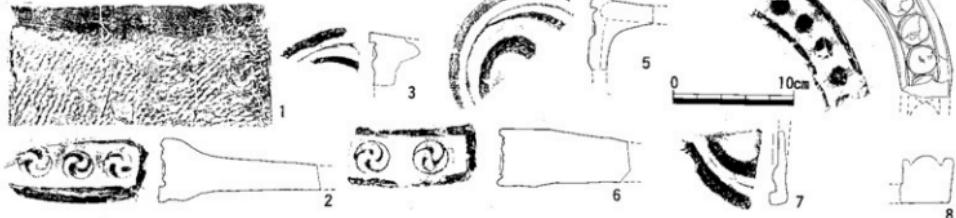
第4図 遺跡の位置及び造構配置図



第5図 丸山3号窯跡平・断面



第6図 丸山8号窯跡平・断面図(左上は完掘質平面)



第7図 出土遺物実測図・拓影 (1~3丸山3号、4~6丸山7号、7~8丸山8号出土)

御廐池遺跡

1. 所在地 高松市御廐町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成9年3月25日
～平成9年3月26日
4. 調査面積 約5m²
5. 調査担当者 山本英之・大島和則
6. 調査の原因 御廐池浚渫工事に伴う不時発見
7. 調査結果の概要

遺跡は、御廐池の保水量確保のための浚渫工事の際に一般からの通報によって発見されたもので、連絡を受けた香川県教育委員会と高松市教育委員会の文化財担当者による現地確認と遺跡発見届等の手続きを経て、前記日程により確認調査を実施した。

浚渫工事は、池底の南西ほぼ4分の1に当たる推定2.5ヘクタールにおいて、御廐池南西から北東に派生する舌状の緩斜面を削平するかたちとなっており、南堤防壠では3メートル近くの掘削深度になっている。

遺跡は、掘削深度が比較的浅い工事範囲北半に溝跡、柱穴、竪穴住居等が黒褐色の遺構埋土によって確認でき、中でも南西から北東流する溝状遺構（検出幅1.5m、深さ0.7m）からは、表探遺物のほぼ全てをしめる遺物コレクション6箱分の弥生土器を採集した。埋土の状況等から、検出の遺構の大部分が溝状遺構と同様弥生時代終末期を中心とする時期の遺構と考えられる。

図化遺物は溝状遺構の表探品から抽出したものである。

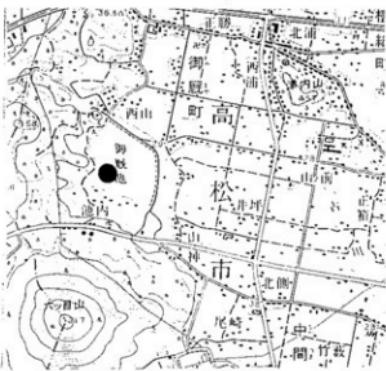
1～5は壺、6～16は甕の破片である。17・18は壺甕の器種が確定しがたいが底部片、19の口縁部片も器種が不明確ながら、二重口縁壺とも考えられる。20～28は高杯片、29・30は鉢である。以上の土器片はおむね鈍い褐色から鈍い燈色の色調を示し、石英、長石の砂粒を多く含んで良好な焼成となっているが、一方で表面の摩耗も進んでいる。

31～34は中世の遺物片で、おもに池底の西端の斜面部を中心として採集されたものである。35は断面四角形の石柱状の残欠であるが用途等は不明である。

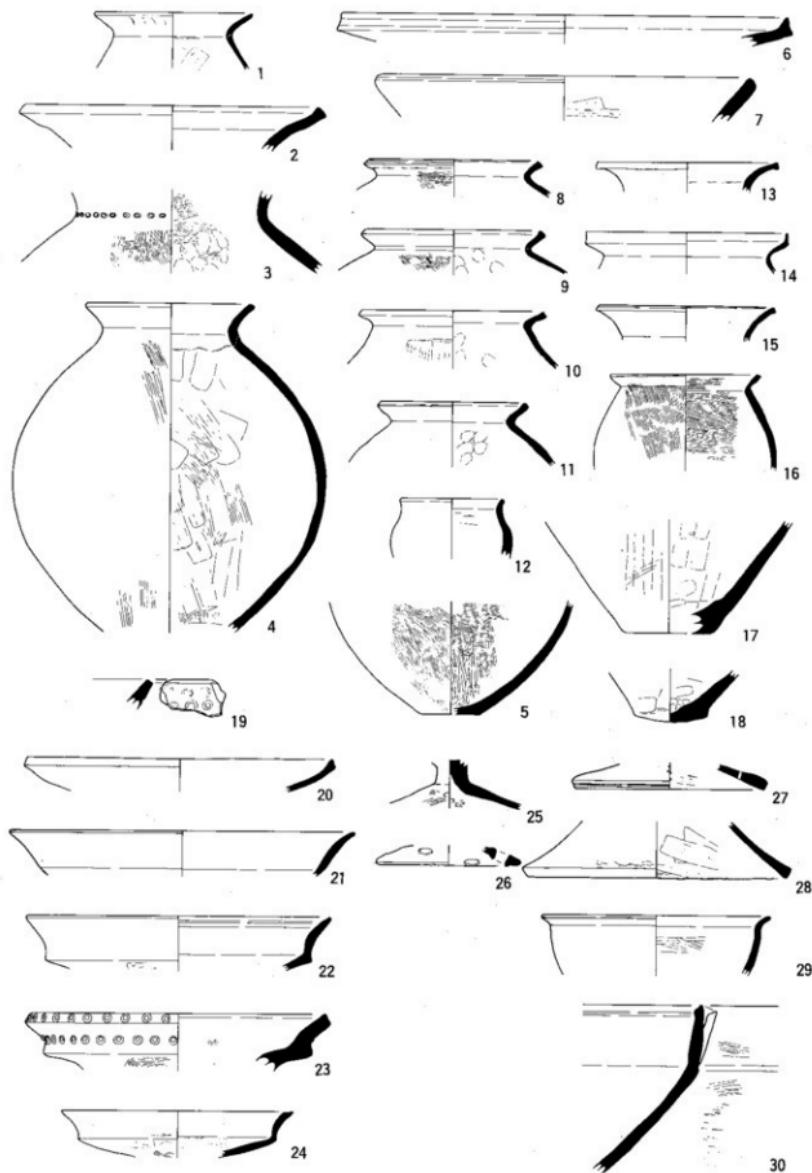
8.まとめ

御廐池遺跡は、既往の分布地図では池の西半部が中世の散布地としてとらえられており、今回の採集でも当該期の遺物若干が見られたが、池の中央部では弥生時代終末期の集落がまとまって存在することが確認された。高松平野のため池、特に皿池には周囲の築堤のみで貯水するものが多く、予想以上に築堤前の遺構面が温存されている例が多いものと思われる。反面、ため池工事が農閑期の限られた時期に集中的に施工され、工程上の制約が埋蔵文化財の確認と保護を困難なものにしている現実があり、今後保護行政のあり方に一層の模索が必要と考えられる。

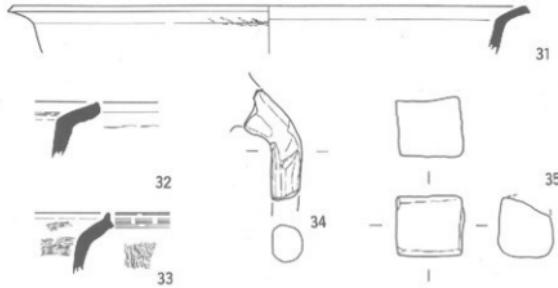
(山本)



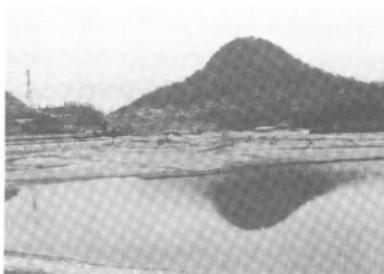
第1図 遺跡の位置（「白峰山」）



第2図 出土遺物実測図 ($S = 1/4$) 弥生



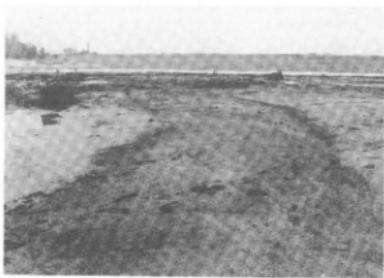
第3図 出土遺物実測図 ($S = 1/4$) 中世



第4図 立会地遠景



第5図 立会風景



第6図 遺構検出状況



第7図 土器出土状況

こうざいみなみにしうち きなしふじい 香西南西打遺跡、鬼無藤井遺跡

1. 所在地 高松市香西南町・鬼無町

2. 調査主体 高松市教育委員会

3. 調査期間 平成8年12月11日

～平成9年3月31日

4. 調査面積 約1,750m²

5. 調査担当者 山元敏裕

6. 調査の原因 JR貨物移転関連事業

7. 調査の概要

今年度の調査は、市道および貨物ヤード建設予定地内の試掘調査による調査対象範囲の確定および一部本調査である。試掘調査は、遺構が確認できる深さまで重機で下げた後、人力により遺構、遺物の確認を行った。調査の結果、調査地を南北に分断する市道木太鬼無線より南側では弥生時代前期から江戸時代にかけての遺構、遺物を確認した。試掘範囲が狭かったものの現在の地割に合う東西および南北方向の溝を確認したほか、柱穴の確認より掘立柱建物の存在が想定できる。これらの遺構は、試掘調査で出土した遺物より古代から中世頃の時期のものであると考えられる。

一方、道路より北側では南側より遺構密度が低いものの、溝、土坑等を確認した。出土した遺物より南側と同様に古代から中世頃の時期のものであると考えられる。

8. まとめ

試掘調査により、遺構、遺物が確認できた部分に関しては、順次本調査の予定である。一部工事が急ぐ部分に関しては、一部本調査を実施し試掘調査のデーターに沿った成果が出てきている。遺跡の全体像は、本格的な発掘調査に入る平成9年度の成果によって判明するものと考えられる。

(山元)



第1図 遺跡の位置(「白峰山」「高松南部」)



第2図 試掘トレンチ遺構検出状況



第3図 遺構完掘状況

藤尾城跡

1. 所在地 高松市香西本町465
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成9年1月8日～1月10日
4. 調査面積 206m²
5. 調査担当者 大嶋和則
6. 調査の原因 急傾斜地崩壈防止工事
7. 調査結果の概要

調査地は宇佐神社の所在する藤尾山の南東斜面の裾部分で、藤尾城の縄張りの中では本丸の南東部分で天神郭との間にあたる。現状は山林で、約60度の急傾斜地となっており、石垣で補強している部分も見られる。

急傾斜で幅も狭いという条件から、工事に先立ち調査を行うことが困難であるため、工事と並行して調査を始めた。工事用の重機により地山まで掘削し、遺構および遺物の有無の確認に努めた。また数箇所で掘削を中断し、土層断面図の作成も行った。遺構としては調査地の西端で19世紀の土坑を1基確認しているだけである。平成7年度の城跡の北側において実施した調査では山の裾部分においてL字状に掘削した痕跡が検出されているが、今回の調査では地山を整形した痕跡は認められなかった。地山の上には何層かの堆積が認められたが、すべて上方からの流土であった。その流土中には瓦、陶磁器、羽釜、焰烙、備前焼擂鉢、土鍤などコンテナ15箱分の遺物が含まれていた。瓦の中には「香川郡」「多田傳右衛門満」等の線刻が認められるものも存在した。

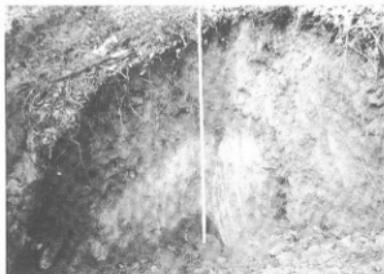
8. まとめ

今回の調査で出土した遺物の大半は18世紀後半～19世紀を中心とした時期のもので、瓦の出土量が多く、宇佐神社に関係するものと思われる。瓦の中では、丸瓦2点、平瓦1点にはコピキAが認められ、織豊期以前に瓦を用いた建物が存在していたことが判明した。また、同時期のものと思われる巴文軒丸瓦も1点出土した。

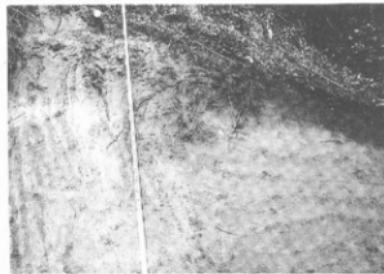
(大嶋)



第1図 遺跡の位置（「五色台」「高松北部」）



第2図 掘削断面



第3図 土坑検出状況

にし 西ハゼ土居遺跡

1. 所在地 高松市西ハゼ町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成8年8月5日～8月12日
4. 調査面積 約280m²
5. 調査担当者 山元敏裕
6. 調査の原因 都市計画道路木太鬼無線
7. 調査の概要

試掘調査範囲は都市計画道路錦町綾南国分寺線より東側で県道勅使室新線より西側の区間で用地買収の完了した箇所について実施した。試掘トレンチは17本を設定し、重機により層毎に掘削を行い、断面および平面において遺構、遺物の確認作業を行った。試掘調査の結果弥生時代～江戸時代にかけての遺構、遺物を確認する事ができた。調査対象地の西側は弥生時代から奈良、平安時代にかけての遺物が層位ごとに確認でき、堆積も深いことから調査地北側の奥の池から流れてくる谷状地形と推定できる。調査地中央部は周囲よりも標高が低いこと、砂、砂礫を中心とする土層堆積状況から比較的新しい自然河川と考えられる。調査地の東側は安定した微高地に柱穴、溝等が確認できることから集落が広がっているものと想定できる。

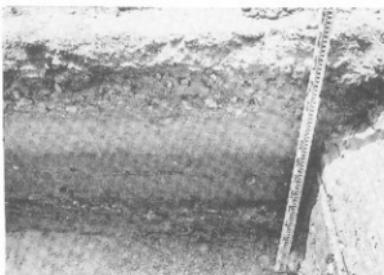
8.まとめ

試掘調査の結果、比較的新しい自然河川が存在する調査地中央部分を除くその他の地区では弥生時代から江戸時代にかけての遺構、遺物を確認したことより、当該地にはこれらの時代の遺構、遺物が広がっているものと考えられる。試掘調査で遺構、遺物が確認できた部分に関しては、道路工事に先立ち本調査の必要があると考えられる。なお当該地は原作者と協議の上、平成9年度において西半部を中心として本調査の予定である。

(山元)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 トレンチ土層堆積状況



第3図 ピット検出状況

木太中村地区

1. 調査地 高松市木太町1614-3ほか
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成8年10月7日～10日9日
4. 調査面積 76m²
5. 調査担当者 大嶋和則
6. 調査の原因 都市計画道路福岡三谷線
7. 調査結果の概要

遺跡は、都市計画道路室町新田線と福岡三谷線が交わる交差点の北で、福岡三谷線の延長部分に相当する。現状は宅地および水田であり、現地表面の標高は2.50mと低い。対象地は南北100m、東西幅20mであったので、対象地の東西両端において南北方向の試掘トレンチを6箇所設定し、南北側より第1～6トレンチとした。

第1トレンチは、微低地となっており、低地部分の埋土である黒褐色粘質土層中には、中世後半の遺物が多く含まれていた。第2～第4トレンチは、微高地となっており、土坑、柱穴、溝等多数の遺構を検出した。出土遺物等から中世後半の時期が考えられる。第5・第6トレンチでは、また微低地となっており、その埋土である黒色粘質土層中には、弥生時代～中世に至る土器片が多量に認められた。微低地の底面での遺構の有無は湧水のため確認できなかった。また、この黒色粘質土層の上面において、中～近世のものとみられる溝、土坑、柱穴等の遺構が掘り込まれていることも確認した。

8. まとめ

今回の調査地の中央部は比較的安定した微高地となっており、中世後半には集落が営まれ、その南北両側には微低地が広がる状況であったことがうかがえた。その他、弥生時代と6世紀の遺物が多く含まれていたことから、周辺にこれらの時期の遺跡が所在する可能性は高い。

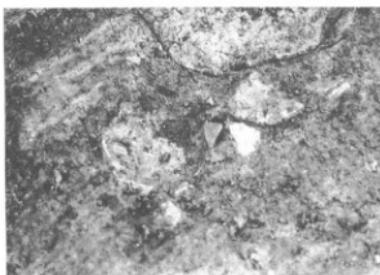
原因者との協議により、平成9年度以降に事前調査を実施する予定である。 (大嶋)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 遺構検出状況



第3図 土器出土状況

はやしきこ
林谷遺跡、林下所遺跡

1. 所在地 高松市林町2063番地外
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成9年2月26日
～平成9年3月31日
4. 調査面積 約478m²
5. 調査担当者 山本英之
6. 調査の原因 四国横断自動車道周辺整備
(市道改良工事)
7. 調査結果の概要

四国横断自動車道高松中央インターの建設に伴う周辺整備事業として行われる市道改良工事の予定地のうち、林町6号線外4路線について調査を実施した。いざれも現在の里道や畦道を拡幅整備するもので、事实上調査可能な部分は現道沿いに2m程度と狭い範囲だったが、5路線中2路線で条里界線等の遺構を確認した。

都市計画道路福岡三谷線西側の林町5・61号線（林谷遺跡）は全体が微高地に位置しているため、粘土採取や水量確保のために全体に削平されていた。このためか、遺構としては61号線西端部で東西方向の条里界線1条を確認したのみであった。遺構は幅2.5m以上、深さ20～30cm程度で市道用地の西端から緩やかに蛇行しながら東へ伸び、20mの地点で調査区の北へ逃げている。上層に薄い乳白色細砂層、下層は灰褐色シルト層が堆積し、埋土から須恵器片若干が出土した。

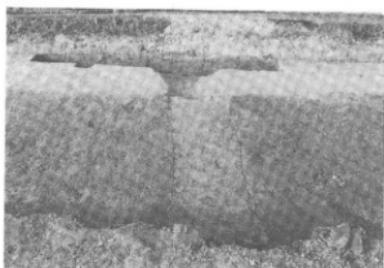
一方、都市計画道路福岡三谷線東側の市道林町6・10・60号線（林下所遺跡）も6・60号線の東端の一部が旧河道に当たる以外は安定した微高地であると考えられるが、削平や搅乱によるものか遺構の出土は希薄であった。その中で、60号線西半部にあっては微高地シルト層を破る噴出が数ヵ所、近世以降と思われる井戸、条里坪界線等が確認され、遺構が集中していた。条里界線は東西・南北各1条が交差して確認され、東西方向のものは数次にわたって埋没と再掘削が繰り返されていた。出土遺物からおおむね近世全般を通じた存続が推定される。（山本）



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 林谷遺跡（条里坪界線）



第3図 林下所遺跡（条里坪界線）

弘福寺領田図比定地南地区遺跡

1. 所在地 高松市林町 6番地34外
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成8年11月1日
～平成9年3月31日
4. 調査面積 約1,700m²
5. 調査担当者 山本英之
6. 調査の原因 弘福寺領田図比定地の確認調査
7. 調査結果の概要

調査地点は、山田郡8条10里9・10坪に相当する田図の南地区比定地内で、田図の記載では水田とされている。前年度の隣接地の調査によって、弥生後期から8世紀の遺物を伴う包含層を確認したことから、遺構の性格と広がりをみるためにここに調査区を設定した。

調査区は、現地表から20cmほどの深さで砂礫質の地山が確認できる微高地で、戦時中の飛行場接收と引き続く農地払い下げによって少なくとも30cm程度は削平が及んでいると考えられるものの、弥生前期から現代にいたる遺構が確認できた。弥生前期では土器廃棄土坑5、後期には竪穴住居3、性格不明の落ち込み2、7世紀前後頃の性格不明の落ち込み1、古代末から中世の石組み井戸1、近世から現代にかけての溝跡（条里坪境を形成する）2などである。溝跡の1本は順道図絵と対照が可能で、もう一方は昭和初めに建設された三谷幹線水路であるが、位置的に推定条里地割と一致しているので結果として近世以前の条里復原の資料となる。

今回の調査では、田図や莊園に直接に関わる遺構は確認できず、土地利用の変遷をうかがえるような土壤層の堆積もなかった。しかし、奈良時代に近い遺構として7世紀後半の谷状の落ち込みは高燥な砂質土が包含層を形成しており、12世紀前後の井戸からは青磁碗1点が出土するなど、一見田図の記載とは合わせて理解しがたい事実もみられ、今後の検討の材料となる。

（山本）



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 西半完掘全景



第3図 東半完掘全景

みや にし いつ かく
宮西・一角遺跡

1. 所在地 高松市林町76番地56外
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成9年1月24日～2月12日
4. 調査面積 約160m²
5. 調査担当者 山本英之
6. 調査の原因 市道林町47号線改良工事
7. 調査結果の概要

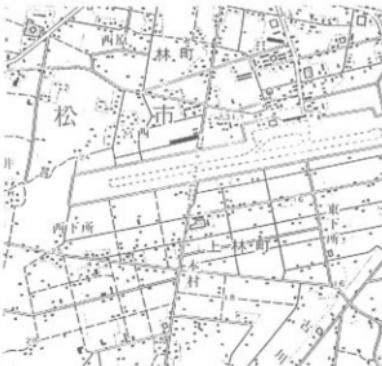
今回の調査は第3年次目に当たり、栄西延長約600mのうちの東端1/3が対照となった。

調査の結果、現地表下50～70cmまでは終戦後の飛行場造成や農地復旧の際の客土が広い範囲で確認でき、目立った遺構は確認できなかつた。しかし、調査区の中頃に幅員約12m、現地表からの最深部1.8mで東北流する旧河道が存在し、埋積の過程で弥生時代全般、および古墳時代後期の二時期の包含層を含む10層の堆積を形成していた。

弥生期の遺物としては、現地表下約1mの黒色シルト層上層に風化砂岩礫片とともに前期壺形部、同壺蓋、後期高杯脚・杯部片等の弥生土器が出土した。また、古墳時代後期では旧河道がほぼ埋まりきった時点で旧河道部分を中心に広い範囲に暗褐色シルト質極細砂層が水平に堆積しており、3mの間隔で2ヶ所の畦畔状の高まりも確認できたため、水田層の可能性も考えられる。

8.まとめ

本遺跡の周辺部では、空港跡地遺跡・弘福寺領田団比定地等の調査が隣り合って進められている。これらによって、この地域では弥生時代後期に大規模な集落が営まれ、さらに古墳時代の集落跡や方形周溝墓の造営を経て、古代にかけてはいち早く水田開発や条里の施工が行われてきたことが明らかになりつつある。このような状況の中で本遺跡の調査は、空港跡地一帯で弥生集落や水田開発がより広い範囲に及んで営まれていたことを示す意味で重要な成果であり、また、本遺跡西部に所在が推定されている弘福寺領田団南地区比定地を念頭に置くと、比定地周辺も含めた地域の先進性を考えさせるものであろう。(山本)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 旧河道堆積状況



第3図 旧河道底自然木出土状況

み たにちょうなんかいどう
三谷町南海道推定地

1. 所在地 高松市三谷町1071番地
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成9年2月3日
～平成9年3月31日
4. 調査面積 約460m²
5. 調査担当者 山本英之
6. 調査の原因 古代南海道の確認調査
7. 調査結果の概要

弘福寺領田図調査事業の一環として、条里地割の里界線敷設の基準と考えられる古代南海道について、前年度に引き続き確認調査を行った。調査地点は、前年度の小作川西岸段丘部の調査区からさらに西へ60mほど離れた地点で、地形的には微高地のほぼ頂部に当たると考えられる。

調査の結果、南海道に当たると考えられたのは調査区南東隅の部分で、地山粘土層が幅3～6mの幅で東西に帯状に浅く掘りくぼまっており、その内部に黄褐色の砂層が堆積していた。砂層は調査区東辺の側溝部で50cmと最も堆積が厚く、3層の砂質の堆積層が確認できた。砂層は上位2層が黄褐色、最下層が淡黄褐色のいずれも砂層で、それぞれ10cm程度の厚さが認められた。各層の層境にはマンガンの堅い沈着層が認められ、中、下層の層中には拳大から人頭大の砂岩礫がまばらに置かれていた。遺物は砂層中から須恵器片等細片が若干出土し、時期の限定が困難なもの、おおむね7世紀後半から8世紀全般の幅を考えてよからう。

この遺構は、前年度の切通し状の遺構から南海道推定線に沿った延長部分で確認され、落ち込み内部の砂層、岩礫が材質、状態とともに自然の堆積作用と認められないことから南海道の造成または改修に起因する造作の痕跡と考えられる。

(山本)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 路床の状況



第3図 路床断面の状況

かわみなみひがし 川南東遺跡

1. 所在地 高松市春日町549-1ほか
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成8年3月21日～6月19日
4. 調査面積 2,300m²
5. 調査担当者 大嶋和則
6. 調査の原因 都市計画道路室町新田線
7. 調査結果の概要

遺跡は、高松平野を形成する河川の一つである新川の西岸にあたる。現地表面の標高は2.80mと低い。平成7年度に行った試掘調査の結果に基づき調査を行った。

調査地は道路、水路等により分断されるため、西からⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの4調査区に分け調査を行った。層序は4層に分層できた。第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は床土、第Ⅲ層は暗褐色砂混粘質土、第Ⅳ層は砂層で、この第Ⅳ層上面の1面のみを遺構面としてとらえることができた。検出した遺構は、溝、土坑、柱穴、井戸、自然河道等多数で、出土遺物などから主に近世～近代にかけてのものである。

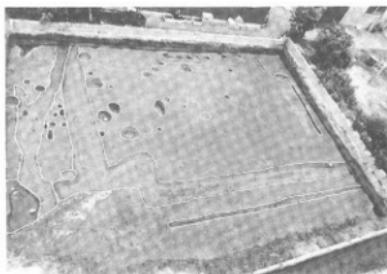
調査地の西端では自然河道を検出しておらず、試掘調査の結果によると河道より西側では遺構は確認されていない。自然河道の東側には、河道に平行するように鋤溝群を検出した。この耕作地のさらに東側に集落域は広がっており、遺跡の東部では、溝で周囲を囲った17世紀後半の屋敷跡、近代建物の基礎跡等も検出した。その他、安政の南海地震に伴う噴砂も検出した。

8.まとめ

検出した遺構のうち、約半数が近代のものであった。特にⅡ区のSK-2075は明治末期の大規模円形土坑で、出土遺物は土器、陶磁器、瓦に加え、建築部材や下駄、椀、茶せんといった木器類も多数一括した状態で出土している。県内では、当該期の資料はほとんど紹介されておらず、また、これまであまり注目を受けていなかったが、今後、当該期の生活様式を復元していく上で重要な資料となりうるものである。
(大嶋)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 近世屋敷跡



第3図 明治の円形土坑

史跡天然記念物屋島

1. 所在地 高松市屋島峯1814-1
屋島西町26林班
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成9年3月3日
～平成9年3月31日
4. 調査面積 450m²
5. 調査担当者 山元敏裕
6. 調査の原因 学術調査
7. 調査の概要

発掘調査は南嶺地区と長崎鼻地区の2箇所において実施した。南嶺地区では調査前から土壘が方形に巡っていることが確認されており、この土壘の時期比定と、土壘の内側に存在する遺構の確認を目的に調査を行った。調査の結果、土壘の内側には両側から最大で50cm大の安山岩を2～3段積み上げ土壘の崩壊を防ぐように作られており、西側土壘についても同様の構築方法が確認できた。土壘中からは備前焼、瓦、古瀬戸等が出上了。

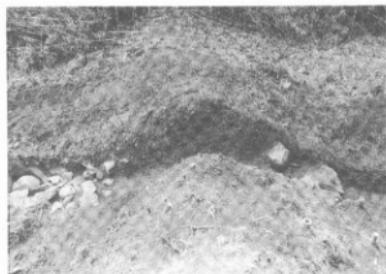
一方、長崎鼻地区では通称鯨の墓と呼ばれている祠が存在する丘陵頂部に2箇所トレンチを設定し調査を行った。調査の結果、長崎鼻古墳の前方部に向かって設定した東トレンチでは、20cm程度の河原石を利用して構築された葺石を確認した他、前方部を作るため丘陵をカットしていることがわかった。

8.まとめ

南嶺地区で確認した土壘遺構は出土遺物から室町時代頃の遺構と考えられ屋島寺に関係する遺構の可能性が高い。一方、長崎鼻地区での調査では、鯨の墓周辺で遺構が確認できなかつたが、長崎鼻古墳の前方部で、一部崩落が見られるものの、葺石が良好な形で保存されていることがわかったのは一つの成果である。



第1図 遺跡の位置（「高松北部」）



第2図 土壘状遺構断ち割り状況



第3図 長崎鼻古墳前方部葺石検出状況

しん でん ほん むら
新田本村遺跡

1. 所在地 高松市新田町
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成8年12月2日
～平成9年3月28日
4. 調査面積 3,600m²
5. 調査担当者 山元敏裕
6. 調査の原因 都市計画道室町新田線
7. 調査結果の概要

遺跡は平成6年に香川県埋蔵文化財調査センターが調査した小山・南谷遺跡に西接する位置にある。

1工区で検出した遺構は9世紀から近代までの長期間にわたるもので、4面の遺構面が確認された。最上の1面では、近代の溝・土坑と江戸時代の水田（南北・東西の犁跡）井戸1基、2・3面では条里地割りに伴う数本の溝・水田（南北・東西の犁跡）が検出された。最下位の4面では掘立柱建物3棟、井戸2基、南北・東西方向の多数の溝、約270基のピット・土坑が検出された。SD106は幅5m、深さ約1mを測り、直線的に東西方向に延びている。遺物は9世紀後半に比定される須恵器、土師器、青磁、瓦等多量に出土した。

2工区で検出された遺構は掘立柱建物7棟以上、井戸1基、溝・ピット・土坑多数であり、時期は9世紀から近代である。

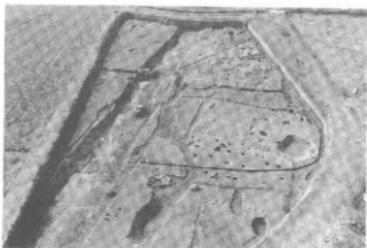
3工区では9～13世紀の掘立柱建物2棟、多数の溝、犁跡が検出された。SB3001は小山・南谷遺跡VI区の建物の続きであり、5×2間の東西方向の総柱建物であると確認された。SB3002は1×1間の建物である。東西に延びるSD3002は小山・南谷遺跡のSD701であり、幅5m、深さ1.6mを測り、洪水砂層が厚く堆積していた。

8.まとめ

本遺跡で検出された遺構の中で9世紀に比定される掘立柱建物と溝が最も注目すべきものであり、新田町・高松町の土地利用の変遷を考える上で重要である。(山元)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 2 I 区完掘状況



第3図 3 I 区完掘状況

奥の坊地区

1. 所在地 高松市高松町963-2 ほか
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成8年7月18日～12月12日
4. 調査面積 2,000m²
5. 調査担当者 大嶋和則
6. 調査の原因 高松市東部運動公園整備
7. 調査の概要

高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う事前調査で、平成7年度より試掘調査を順次行っている。調査地は高松市東部の龍王山塊より派生する丘陵で形成される谷状地形の中でも最大の谷部分（奥の坊）に位置する。今年度は、南向き緩斜面に重点を置き、92箇所のトレンチを設定した。

調査の結果、4地点において遺跡を確認した。奥の坊遺跡は弥生中期を中心とした時代の遺跡で、柱穴、溝などが見られた集落域と遺物が多量に投棄された谷状地形からなる。その西側の奥の坊現前遺跡は、平成7年度の試掘調査においてその一端をつかんでいたが、今回の調査で飛鳥～奈良時代の柱穴、土坑、溝等の遺構も認められた。この2つの遺跡の南側には婆ヶ谷から西に向かって流れる自然河道が存在した。この自然河道の南側も丘陵の北側斜面になるが、2つの遺跡を確認した。奥の坊奥池西遺跡では土坑、溝等を検出しており、弥生土器、須恵器等が出土した。大空北遺跡においても柱穴、溝等を検出しており、縄文後期～古代の遺物が出土した。

8.まとめ

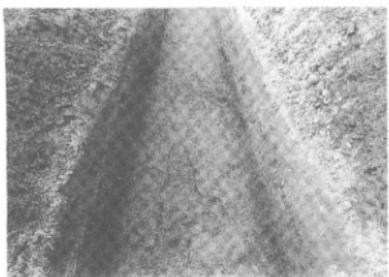
今回の試掘調査の結果、新たに婆ヶ谷から流れる自然河道の両岸において4つの遺跡を確認しておりその総面積は30,000m²余にもおよぶ。まだ試掘調査未了部分も存在しているため、今後も継続して試掘調査を実施していく予定である。

原因者との協議の結果、平成8年度より事前調査を着手している。

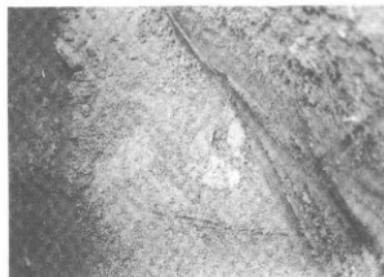
(大嶋)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」「志度」）



第2図 遺構検出状況



第3図 土器棺出土状況

おく ほう ほん げん まえ 奥の坊権現前遺跡

1. 所在地 高松市高松町1333ほか
2. 調査主体 高松市教育委員会
3. 調査期間 平成9年2月10日～3月24日
4. 調査面積 1,800m²
5. 調査担当者 大鷗和則
6. 調査の原因 高松市東部運動公園整備
7. 調査結果の概要

高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う事前調査で、平成7年度および平成8年度に実施した試掘調査結果に基づき調査を行った。本年度の調査地は、県道高松志度線の北側部分で、運動公園予定地内の最低地部分に相当する。

調査の結果、集落跡の一部とその南側を流れる自然河道を検出した。出土遺物総数は、コンテナ12箱分である。

集落部分では、主に古代の柱穴、土坑、溝等を検出した。特にSD-08では7世紀末～8世紀の土器群を検出した。

自然河道は、現地形でも一段低くなっている部分に相当する。調査地の西側は、現在でも溜池となっており、自然河道の名残をとどめている。自然河道の埋土中には、弥生時代、7～8世紀、13世紀の3時期の遺物が含まれていた。遺物の多くは、自然河道の北岸部分に集中しており、集落側より投棄された状態で出土した。弥生時代の遺物には製塙土器や紡錘車が見られ、また、13世紀の遺物には、青磁、白磁なども数点認められた。

8.まとめ

今回の調査は、遺跡の南端部分のみの調査であったが、集落部分の遺構密度はかなり高かった。試掘調査の結果では、遺跡の範囲はさらに北側へ延びることが判明しており、集落の中心部分も今回の調査地の北側になると予想されている。遺跡の全容を知るには、今後の調査に期待するところが大きい。

（大鷗）



第1図 遺跡の位置（「高松南部」「志度」）



第2図 自然河道掘削状況



第3図 土器出土状況

由佐城跡

1. 所在地 香川郡香南町大字由佐字中屋
2. 調査主体 香南町教育委員会
3. 調査期間 平成8年9月3日～9月29日
平成8年10月14日～10月18日
4. 調査面積 約360m²
約411m²
5. 調査担当者 片桐節子
6. 調査の原因 町立歴史民俗郷土館建設
7. 調査の結果の概要

調査の結果、堀と柱穴・土杭等を確認した。堀は土塁の東からほぼ併行して東に延びる堀2本と南側の堀の東端約1mから南に延びる堀1本の計3本を検出した。規模は堀1が長さ約30.5m、幅約2～3.2m、深さ1～1.5m、堀2は長さ約28m、幅約2～3m、深さ約1.1～1.4m、堀3は完掘していないため全容は不明であるが幅約3.5m、深さ約1m、現存長約4mを計る。堀内からは、量的には少ないが、唐津灰釉枕や備前摺鉢等が出土しており、17世紀前後のものと思われる。

また、「土塁」といわれていたものについても地形測量と土層観察を実施した結果、版築層が認められたため土塁であると確定した。これはさらに北約0.8mは延びていたものと思われる。

8.まとめ

由佐城は、南北朝時代細川頼春に従って来讃した益子氏が戦功によりこの地を賜い、城を築き名前も由佐氏と改めたもので、以来その子孫が居住していたものである。

今回の調査で確認した土塁の版築層の下層から須恵質の体部片が出土したことから、その構築時期は中世後半以降と考えられる。堀も同時に掘削されたものと思われ、その後、寛永年間頃に堀が廃棄されたのである。

由佐城には江戸時代に描かれた絵図が残っており。それによると城域は方4町である。今回の調査は由佐城の一部を調査したに過ぎず、中世文書・近世文書が多く残る由佐家の解明はさらに周辺の調査を必要とする。
(片桐)



第1図 遺跡の位置



第2図 遺構完掘状況



第3図 堀全景

田中砂古遺跡

1. 所在地 木田郡三木町田中1734
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成9年1月13日～2月25日
4. 調査面積 194m²
5. 調査担当者 三木町教育委員会 石井健一
6. 調査の原因 県営圃場整備事業
7. 調査結果の概要

田中砂古遺跡は蓮池の西で東にかけて緩やかに下る微高地に位置し平成8年3月に行われた試掘調査により発見された遺跡である。調査の結果、竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟等を検出した。このうちSH01は須恵器を伴わない竪付きの竪穴住居である。また、同圃場整備地内の排水路工事部分からは幅194cm、深さ65cmの大構、幅52cm、深さ71cmの大型ピット、竪穴住居2棟など古墳時代中期から古代の遺構が多数検出された。

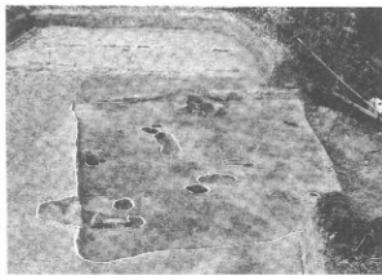
8.まとめ

今回の調査は限定された狭い範囲での調査であったが、排水路工事部分での遺構の確認により田中砂古遺跡は広範囲にわたり古墳時代中期から古代の集落遺跡が展開していることが判明した。また、立地環境により尾端遺跡、南天枝遺跡とともに三木町田中地区の集落遺跡を解明する上で貴重な資料といえる。

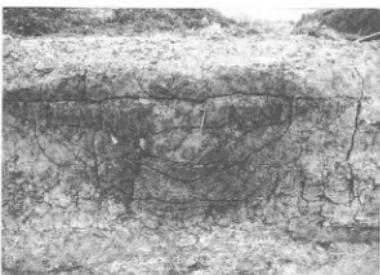
(石井)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 SH01検出状況



第3図 SD15土層断面

みなみ あま えだ
南天枝遺跡

1. 所在地 木田郡三木町田中字天枝
2. 調査主体 三木町教育委員会
3. 調査期間 平成9年2月13日～3月31日
4. 調査面積 460m²
5. 調査担当者 三木町教育委員会 石井健一
6. 調査に至る経過

南天枝遺跡は県道高松長尾大内線建設事業に伴い発掘調査が行なわれ埋蔵文化財包蔵地であることが確認された。その包蔵地に北隣する個人農地について地下げが計画され試掘調査と併せて本調査を実施することとなった。

7. 調査結果の概要

今回は事業が予定されている2箇所について

発掘調査を行った。I区からは竪穴住居を2棟、掘立柱建物を8棟など西半部を中心に古墳時代初頭から中世にかけての遺構を数多く検出した。また、II区からは東西方向に流れるSD01と東西から南北に湾曲するSD02を検出した。出土遺物より中世期の所産である。II区北東端の赤茶色小粒礫層からは縄文時代晩期の土器の包含を確認した。また、この縄文土器は町内初出土である。

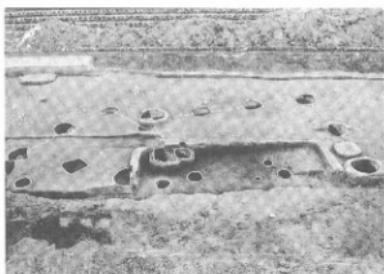
8. まとめ

南天枝遺跡は跡香川県埋蔵文化財調査センターが平成8年度に行った調査地に北隣するものであり、当該地においても古代より中世にかけての集落が展開していることが判明した。また、このことから周辺にも集落域が広範囲に拡っている可能性が高い。今後、周辺地区的開発に関しては事前に埋蔵文化財の包含状況を確認する必要がある。

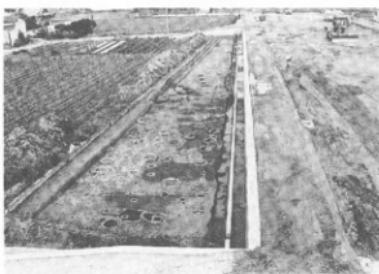
(石井)



第1図 遺跡の位置（「高松南部」）



第2図 SH01完掘状況 南より



第3図 I区完掘状況 西より

りょう 陵 遺 跡

1. 所在地 大川郡長尾町名
2. 調査主体 長尾町教育委員会
3. 調査期間 平成8年4月20日
～平成9年1月26日
4. 調査面積 4,000m²
5. 調査担当者 阿河鏡二 太田朋子 萬木一郎
高畠 豊（大川広域）
6. 調査の原因 県住宅供給公社による宅地造成事業
7. 調査結果の概要

陵遺跡は昨年度の試掘調査の結果発見された弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。今年度は、事業予定地内の主に道路予定部分について発掘調査を行い記録保存をはかった。

調査の結果、堅穴住居・溝・土坑・ピット多数のほか円形周溝墓が1基検出でき、周溝と転落した礫石及び中央に埋葬主体部を確認することができた。東側の半分近くが側壁工事のため破壊されているため全容は不明である。盛土もあったと思われるが削平されている。円丘部は南北軸に約10m、南端に幅約0.8mのテラス状の張り出しがある。周溝は幅が約1.6m、深さ約0.8mをはかる。周溝内からは礫多数と少量の土器及び土器棺が1基検出された。

埋葬主体部は円丘の中央で検出された。主軸を南北と直交するくらいのほぼ東西にとっている。長辺は現状で約2.6m、短辺は約1.6mをはかる。この墓壙の中央において大きさ20cmほどの河原石が長方形を呈する状態で検出された。北西の隅は重なりあっており、遺物は全く出土しなかった。

8.まとめ

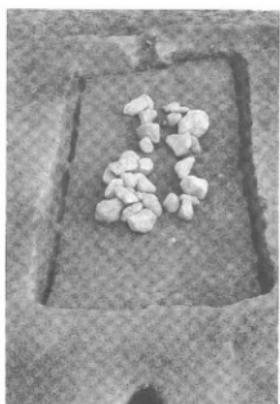
遺構の多くは弥生時代後期に比定されるのだが弥生中期や古墳時代のものも存在する。周囲には辛立遺跡や尾崎西遺跡があり、とくに尾崎西遺跡では円形周溝墓が検出されている。当遺跡との関連性も含め周辺での遺跡の展開や墓制を考えいくうえで重要である。
(阿河)



第2図 円形周溝墓調査状況



第1図 遺跡の位置（「度志」）



第3図 円形周溝墓主体部（西から）